

「多文化共生のまちづくりの推進～“理想のまちの絵を描く”イベントの開催を通じた地域住民と外国人の交流と多文化共生への理解の促進～」成果報告書

1. 概要

■大学名

学校法人比治山学園 比治山大学

■教育研究活動

区分：③交流・移住・定住の促進

テーマ：多文化共生のまちづくりの推進～“理想のまちの絵を描く”イベントの開催を通じた地域住民と外国人の交流と多文化共生への理解の促進～

■連携する市町

東広島市

■連携した企業・団体等

たぶんかひろば pazuru、いっしょに遊ぼう西条キッズ、Labo Miyata Party、東広島市役所市民生活課国際交流係、JICA 中国

■参加学生

比治山大学 現代文化学部言語文化学科1年 1人
現代文化学部言語文化学科2年 2人
現代文化学部言語文化学科3年 1人

広島修道大学 国際コミュニティ学部地域行政学科3年 2人
国際コミュニティ学部国際政治学科3年 1人
商学部経営学科2年 1人

広島市立大学 国際学部国際学科1年 1人
情報科学部知能工学科3年 1人

広島経済大学 メディアビジネス学部メディアビジネス学科3年 1人
経営学部経営学科3年 1人

広島大学 人間社会科学部研究科教育科学専攻日本語教育学プログラム2年 1人
教育学部第三類日本語教育系 4年 1人
教育学部第三類日本語教育系 3年 1人
総合科学部 3年 1人

日本人学生 13人、中国人留学生 3人、合計 16人

2. 活動の目的

東広島市では外国籍住民が市民全体の5%を超えており、地域と外国籍住民との結びつきの強化が課題となっている。行政等による日本語教育の実施や、外国籍住民を含めた交流行事などの取り組みは進められているものの、言語の違いや情報共有ネットワークの不足などにより、必要な情報へのアクセスが十分でない場合や、地域との関わりが限定的になりがちな状況が見られる。日常のかつ継続的な人的ネットワークの形成という観点からは、なお課題が残されている。本取り組みは、こうした課題を踏まえ、人的ネットワークの構築を通して、外国人住民と地域社会とのつながりを創出し、継続的な関係づくりのきっかけを提供することを目的として実施した。既存の地域コミュニティである「たぶんかひろば pazuru」や「いっしょに遊ぼう西条キッズ」等のネットワークを活用し、参加しやすい交流の場を企画・運営した。

3. 活動の内容

1) イベント実施の準備

2025年7月より、オンラインおよび対面でミーティングを重ね、「理想のまちを描こう」イベント実施の企画を行った。企画にあたって、年齢、国籍、宗教、文化の異なるさまざまな参加者が安心して参加できるよう、配慮事項や運営上の工夫について検討した。その実践的な学びの機会として、たぶんかひろば pazuru 主催のイベントに参加し、多文化交流の実践から具体的な運営方法や配慮点を学ぶとともに、やさしい日本語やノンバーバルコミュニケーションの活用など、言語や文化の違いを踏まえたコミュニケーションの方法について理解を深めた。

①8月24日「ミニ夏祭り」

8月に実施された「ミニ夏祭り」には、子どもから大人まで約60名が参加し、国籍や宗教も多様であった。参加者はそうめん流しの準備から食事、遊びまでを共に行い、交流を深めた。

参加した学生は宗教や文化の違いへの具体的な配慮や、言語に依存しない体験型活動の有効性を実践的に学んだ。また、ノンバーバルコミュニケーションや、やさしい日本語の活用など、言語の壁を越える工夫の必要性も認識した。一方で、大人数での交流方法や運営体制には課題も見られ、今後の改善に向けた具体的な検討材料を得る機会となった。これらの経験を通して、多文化共生を実践的に捉える視点と企画運営力を高めることができた。



②9月20日「お隣さんはアルジェリア人」

9月に実施された「お隣さんはアルジェリア人」では、アルジェリア出身の方が英語で語る内容をやさしい日本語で通訳する工夫がなされ、日本人・外国人双方に開かれた形で交流が行われた。また、アルジェリアのお菓子の試食も取り入れられ、食文化を通じた理解促進の機会となった。

参加した学生は、子どもたちの性格の違いに応じた関わりの重要性を学び、活発な子への安全配慮や控えめな子への声かけなどを実践した。さらに、外国人住民が主体となって異文化理解を発信する場づくりの意義を実感するとともに、英語通訳の難しさを通して語学力向上の課題も認識した。

これらの事前参加は、本企画における「支援」ではなく「協働」を前提とした場づくりの設計に具体的な示唆を与えるものであった。

2) 9月9日、10日 研修合宿 ひろしま国際プラザにて

9月には研修合宿を実施し、JICA 中国による異文化理解講座を受講するとともに、東広島市役所職員による講話「多文化共生における取り組みと課題」を聴講した。講座では、

異文化をどのように捉えるかという視点や、異文化環境下における心理状況の理解について学んだ。講話では東広島市の具体的な取り組みとその課題を把握し、地域における現状と課題への理解を深めた。また、比治山大学講師・菅川裕希による「やさしい日本語」講座を実施し、多様な背景をもつ人々に配慮した、わかりやすい表現方法や伝え方について学ぶ機会を設けた。

3) 11月29日「理想のまちを描こう」イベント実施（ひろしま国際プラザにて）

参加者：35名（子どもから高齢者まで）

国籍：ジャマイカ/ベルギー/アルジェリア/バングラデシュ/インドネシア/中国/日本

アイスブレイクを通して対話しやすい雰囲気づくりを行い、対話を重ねる中で現在住んでいるまちについて考察し、理想のまちを描いた。対話の中では、参加者それぞれの立場や経験に基づく多様な意見が共有され、新たな視点や気づきが生まれた。



4) 活動報告

①活動報告・振り返り（オンライン12月5日）

出席者：学生6名、東広島市役所職員（市民生活課）1名、Labo Miyata Party1名、たぶんかひろば pazuru2名、いっしょに遊ぼう西条キッズ1名

②ポスター発表（12月21日）「2025 多世代多文化 年の終わりの交流会」にて （主催：いっしょに遊ぼう西条キッズ）

学生1名が「理想のまちを描こう」イベントについて報告。

③絵の掲示（2026年1月27日～2月5日）

東広島市役所2階にて

④活動報告（2026年2月9日）広島広域都市圏協議会

学生3名が出席し、報告した。



4. 活動の効果

1) 参加学生に対する効果

本活動を通して、学生は国籍・言語・宗教の違いを越えた交流を実際に経験し、共通の目標に向かって協働する機会が得られた。活動中は、専門や大学が異なる学生と役割分担や相互支援が見られ、協働的に取り組む姿勢が確認された。また、「理想のまちを描く」活動を通して、これまで「まちについて考えたことがなかった」という気づきや、自分の「当たり前」は他者の「当たり前」とは異なることへの認識が見られた。さらに、性別・国籍・年代などの多様性を前提に、誰も排除しないまちについて考える機会となり、地域の課題や活動を「自分ごと」として捉える視点が育った。振り返りでは、地域との関わりや社会とのつながりを意識する発言や振り返りが多く見られた。異なる背景や言語、文化を持つ人々とのコミュニケーションについても、実際の体験を通して「伝え合うことは可能である」という実感を得ており、伝え方を工夫する姿勢やコミュニケーション方法の改善が確認できた。さらに、プロジェクトの企画段階から実施まで関わることで、目的設定、活動設計、広報、当日の運営進行などを実践的に学ぶ機会となった。また、コミュニケーション方法や目標設定、進行管理に関する課題が把握され、今後の活動改善に向けた検討材料を得た。

2) 地域・連携団体に対する効果

地域住民と外国人住民が直接交流する機会が生まれ、まちや日常生活に関する身近な話題を共有する中で、相互理解が深まる様子が見られた。また、多様な背景を持つ参加者が関わっていたことから新たなつながりや関係性が生まれるきっかけとなった。実際に、連携団体のイベントへ参加した例も見られ、地域活動への接続が確認された。さらに、参加者同士が連絡先を交換したり、継続的な交流を希望する声も確認された。加えて、これまで連携のなかった団体同士が協働してイベントを実施するようになり、団体間の協力体制の基盤が構築された。

